

Oxfordで教育を考える

去る9月初旬、国際消化管運動シンポジウムが英国で開催された。従来、この種の学会は安上がりを目としてきたので、英国の場合もOxford大学のchrist churchで開催された。参加者はchrist churchの300年前に建てられた学生寮に宿泊した。4泊3食付き、一夕はフルコースのbanquetで4万円弱の参加費は安かった。

しかし、元来、学生寮であるのでガランとした石造りの部屋に勉強机に椅子、1人がやっと横になれる狭いベッド、それに簡単な洋服ダンスがあるだけで、バス、トイレは部屋の外の共同であった。

Oxfordの9月は既に涼しいというより寒いこともあり、暖房の欲しい夜もあった。そんなわけで、ある朝、掃除に来たおばさんとの立ち話に暖房はいつから入るかを尋ねたところ、11月にならなくては絶対に入れないと言う。定めし寒いことだろうと言うと、丁度そこに巡回して来たguardも加わり、Oxford大学の教育論をくさり、

「日本ではどういうふうになっているか知らんが、Oxford大学の卒業生はイギリスのtopとして活躍するだけではなく、世界中で活躍しているんでね、真夏のインドでもネクタイをしめているし、北極でも南極でも出掛けていくんだ。エベレストにも登ったんですよ…」ウンウンと言って聞いていればきりがなし、学会も始まるのでその旨告げると「Yes, sir…」。

英国病という言葉ができて久しいが、Oxford大学では学生寮の掃除のおばさんからchrist churchの山高帽のguardのおじさんまでがOxford大学に英国人としての誇りを持ち、学生にも質実剛健を旨とし教育が行われている事実を思うと、少なくともOxfordやCambridgeでは想像以上に厳しい生活があることに敬服せざるを得なかった。それにひきかえ、今の日本の学生の贅沢さには疑問を覚え、こうした現状が本当に良いことなのか学資を出している親にしても真剣に考えなくてはなりませんよ。

(群馬大学医療短期大学部)伊藤 漸

□海外文献紹介□

大腸癌再発に関する手術前後の輸血の影響

Effect of perioperative blood transfusion on recurrence of colorectal cancer: Parrott NR, et al (Br J Surg 73: 970-973, 1986)

輸血の免疫抑制的な効果が、腎移植患者にとって好都合であることはよく知られている。このことが癌の治療手術を受けた患者に、どのように不利益になるかはわかっていない。

1983年、Burrowsが177例の大腸癌を調べたところ、輸血患者でその不利益な影響を見出した。続いて1985年、BlumbergやFosterが輸血が癌再発の明らかなリスク因子であることを認めた。

著者らは、大腸癌で治癒切除を受

けた517人の患者で、術前後(前後14日以内)の輸血が、疾病の死亡率、再発率に及ぼす影響を調べた。輸血、非輸血グループは、年齢、性、Dukesステージ、組織分化度においてほぼ一致をみた。輸血グループに直腸癌が多かったが、結腸癌の分布には差異がなかった。死亡曲線の分析では、輸血患者は5年後の再発率が20%以上高く、死亡率で16%高かった。直腸癌を除外した結腸癌変のみでも同様な傾向がみられた。つまり輸血患者では、5年後の再発率および死亡率が夫々24%、15%高かった。著者らのセンターでの研究で、腎移植患者での輸血効果は、 α_2 -macroglobulinのごとき非特異的免疫抑制性血漿蛋白によることを示唆した。悪性疾患のコントロールに免疫機構が関係すると言われ、動物

実験でも、輸血が動物の腫瘍モデルで腫瘍の成長を促進することがわかっている。輸血を必要とする例は、不要例に比し、腫瘍が生物学的により悪性度が高く、より進行しているのではないかと疑問を抱かせるかもしれないが、2つのグループのDukesステージや分化度はよくマッチしているので、それは当たらない。

著者らは、輸血と大腸癌の再発の間に直接の因果関係があるとは言わないが、輸血が大腸癌の治療切除を受けた患者での死亡率、再発率の増加に何らかの関連があるのではないかと述べ、大腸癌の手術に際し、できることなら輸血は避けるべきことを強調している。

(愛知県がんセンター消化器内科

小林世美 抄)